新刊紹介

近衛典子・福田安典・宮本祐規子編『江戸の実用書　ペット・園芸・くらしの本』

山口智弘

当今の人文学界隈には、「実用」という言葉を聞くと、無意識に身構えてしまう嫌いがあるようだ。ライフワークとしての研究の実用性について、さまざまな場面で求められる事々しい弁明に倦怠し、荘子を気取って「無用の用」と居直りたくなることも度々ある我が身からすれば、それも無理からぬことかとも思う。しかし、そうした心身のこわばりによって本書が遠ざけられてしまうのであれば、実に残念でならない。

本書の全体構成は左の通り。

はじめに
第一章　江戸のペット本
第二章　江戸のガーデニング
第三章　江戸の園芸書

第四章　女訓書の世界

附録　『和談三細図会』『犬の草紙』『犬狗養畜伝』『浪華朝顔作方聞書』『蕣花秘書』『秘伝花鏡』『女用文章糸車』翻刻（一部、訓読と口語訳あり。）

第一章で取り上げるのは、近世大坂を代表する戯作者の暁鐘成による『犬の草紙』『犬狗養畜伝』であり、二作品を紐解きながら、当時の犬と人間との触れ合いの様子を描いている。ここから話題は園芸へと転じる。第二章では、近世後期の朝顔ブームに光を当てて、奇談や歌舞伎などの芸能へと波及した流行の顛末を論じ、第三章では、明末清初に成立した陳扶揺『秘伝花鏡』に注目し、その近世日本への流伝を追いながら、日中での隠逸趣味の広がりを考察する。第四章では焦点が女性に移る。近世日本での女訓書の流行について、その理由の究明を端緒として、当時の女性が抱えていた知的渇望の内実に迫っている。

「実用」という言葉によって不覚にも身構えてしまった諸氏は、この構成と概要とに拍子抜けしていることであろう。編者の一人である宮本祐規子氏が述べるように、近世日本文学を研究の持ち場とする十四名に、翻刻者四名を加えた十八名の有志の関心は、「「江戸」に生きる感覚」を知ること、また、「江戸時代の暮らしぶりを覗いてみる」（いずれも二三三頁）ことにある。現代を生きる我々に、経済的な豊かさをもたらすスキルとノウハウ、つまり、いますぐ役立つ過去の暮らしの知恵を読者に提供しようとする意図は微塵もないからである。

ペット・園芸・女性、これらのトピックを一瞥しただけでは、そこに何のつながりも見出すことはできないかもしれない。しかし、本書を通読すると、有志の共有する一つのテーマがここに貫いていることに気が付くであろう。そ

れは、文学が卑近な生活の場に生まれる、ということであり、江戸の書物の海に魅せられた著者たちに誘われて、読者はその瞬間に立ち会うことになるのである。

近世日本は武家の時代であるとともに庶民の時代でもあった。在地の富が流れ込む城下は繁栄し、特に、三都に住まう庶民の生活の質は変わっていく。平素の生活における事物との関わりの機微は、流麗な和文によって綴られて、それは色鮮やかな図版に添えられた。また、経済の好転により、学芸を遊戯のように愛好し、それに没頭する者が現れた。中国の士大夫とは異なるタイプの文人の登場である。彼らは日常の光景や感興を中国古典の知によって捉え直し、それらを典雅かつ怜悧な漢文へと昇華した。本書で言及される一連の実用書には、彼ら彼女らの生活の懊悩は見られない。もちろん、彼らの生活の全てが輝いていたわけではなく、赫赫とした光とは対照的な漆黒の闇があったに違いない。しかし、刮目するべきは、その言葉の虚実ではなく、江戸の暮らしの豊かさと当時の文学の豊かさとは表裏の関係にある、ということである。

金銭的かつ物質的な豊かさを変化の中で実感できた成長の時代は終わり、我々はそれらの享受を所与としている。それゆえに、何を手にして何を手にしていないのか、我々は見失っている。本書が紹介する実用書は、我々が見失っていることを啓発する点において、「実用に役に立たない作品や内容」（五頁）ではない。そして、そのことを示唆する本書もまた、実に有為の書なのである。

（二三八頁　ぺりかん社　二〇二三年六月　三〇〇〇円＋税）